

## 都市とソーシャル・イノベーション

講 師： 同志社大学大学院総合政策科学研究科教授 今里滋氏

指 導 教 官： 水上啓吾准教授

開 講 日： 平成 26 年（2014）10 月 10 日（金曜日）

場 所： 梅田サテライト 6 階 107 教室

議事録担当： 松崎公哉（M1）

### ・講義内容

#### 1、ソーシャル・イノベーションとは？

同志社大学大学院総合政策科学研究科は 20 年目を迎えます。私は 2003 年に九州大学からこちらに参りました。2005 年、文部科学省の競争的資金である「魅力ある大学院教育イニシアチブ」とう公募事業に総合政策科学研究科として応募したのが「ソーシャル・イノベーション研究コース」の設立のきっかけでした。その申請が採択されて、総合科学政策科にソーシャル・イノベーション研究コースができたということです。

その時の申請書に書いたのは、地域の公共的課題解決を解決できる行動型の高度専門職職業人の育成ということです。つまり、地域の公共的課題解決＝ソーシャル・イノベーションということです。今でも総合政策科学研究科のホームページには、そう書いてあります。

ただ私としては、もっと広い意味で考えています。ソーシャル・イノベーションコースの設立にあたっては、私が九州大学の時から大学教育とは別に、地域づくりの NPO、ソーシャルビジネスの NPO をいろいろ立ち上げてきた経験から計画書を書いた、という経緯もあり、ソーシャル・イノベーションの定義は私なりに変化しつつ、現在に至っているところがあります。

簡単に言ってしまうと、ソーシャル・イノベーションというのは「世直し、人助け」、あるいは「現世を天国に近づける人間の営み」。さらには最近では、ビック・ヒストリーという大きな世界観からも定義づけられるのではないかと考えています。ビック・ヒストリーというのは、宇宙の始まりであるビックバンから現在までの宇宙の生成と発展、その過程で諸元素の誕生とその結合の結果としての有機物、さらには生命の誕生を、ひとつの統一的な概念——脆弱性とその偶発的な克服による変化ないし進化——でとらえるものです。これによって、宇宙の中で地球に生まれ、その地球に生命が、さらには人間が誕生したことを説明するわけです。

そのとらえ方によれば、なぜ地球が生まれ、その地球の中で人間が誕生したのか、これ

はある意味大変な奇跡であり、我々は「奇跡的な星」に住む「奇跡的な存在」であるということ。しかも、地球は太陽とほかの惑星との間の絶妙な距離にあることで、大気中の水素と酸素が水という形で結合して存在でき、その上、巨大隕石の衝突で地軸が歪み季節が生まれ、月という衛星のおかげで潮流が海を動かし、生物の誕生と成長の宝庫を持つことが出来た。その地球の歴史の本の最近、約 50 万年前、DNA だけでなく言葉で情報を次世代につなぎ蓄積していくという意味で極めて得意な生物である人類が出現し、アフリカから世界中に散らばり、各地でそれぞれ社会とそのアウトプットとしての文明を築いたわけ。

ところが、ご承知のように、この人類が築き上げた社会、あるいは文明は、人類自身が破壊できるし、現に破壊しつつある状態にあります。ビック・ヒストリーの流れからすれば、「奇跡の存在」である人類、およびその社会、文明を保持して、出来るだけ長く存続させる宇宙的な義務がある、ということになります。言い換えると、放っておけば、かなり高い確率で人類社会はハキョクを迎えるでしょう。それをどこかで阻止して、いい方向に転じる責務がすべての人間に課せられるのではないか。その責務を果たす人間なりその集合体の営みをソーシャル・イノベーションといってもいいのではないか。最近はその風をソーシャル・イノベーションを定義するようになりました。

## 2、子供が生まれて、地域とのかかわり方が変わった

九州大学で行政学と地方自治を教えていましたが、実は子供が生まれて父親になった時に、自分が住んでいる地域の見え方が変わってきました。それまでは、地域がどうなっているかということは、ほとんど関心がありませんでした。またこのころ義理の母が 70 歳になって、赤ちゃんとおばあちゃんという、社会的弱者の代表のような存在と一緒に生活するようになったわけです。

そういう家族を抱える立場から自らが生活する地域社会を見た時に、「これはいかん」と直感しました。狭い道に大量の車が行きかって、事故は起こるし、景観は悪いし、治安も悪い、これは何とかしなければと思ったわけです。ところが、管轄の区役所に「車の規制をしてくれ」と言っても、「それはうちの担当じゃない、警察に言ってくれ」と言われ、警察署に相談すると、「少々交通規制しても焼け石に水だから、道路拡幅する以外にない。道路拡幅は市役所の仕事だから、福岡市の都市計画課に相談してくれ。」とけんもほろろ。今度は、都市計画課に電話してみると、「あの道路は終戦後に都市計画決定され、拡幅が決まっております。しかし、実現するにしても、あと 30 年か 40 年先でしょうな。」と話になりました。そこで、まちづくりは、もう自分たちでやらなければならないと考えようになったわけです。

学者としては「住民参加」とか「住民参画」とか言ってきたわけですが、自分の問題として考えたらどうなのか、ということになったわけです。私は昔から「見たら考える、考

えたら言え、言ったらやれ」と学生に言ってきたこともあって、これは自分がやらなければ、ということで地域活動を始めました。

当時私が住んでいた箱崎校区は平安時代から続く古い町で、こうした古いまちでは、九州大学教授だからと言っておいそれとたやすく受け入れてくれるわけではありません。地域の中に入るには、まずお祭りへの参加からです。それから地元の消防団員になったり、PTA 会長をはじめ地域団体の役員を進んで引き受けたりして、だんだん地域に溶け込み、提言もできる立場になってきました。

ちょうどそういう時期に、箱崎という町に2つの大きな転機が訪れるようになりました。1つは九州大学箱崎キャンパスの移転です。もう1つは、まちの真ん中を走っていたJR鹿児島本線が高架化される連続立体交差事業が始まったことです。このJR鹿児島本線では、以前から事故や自殺が多かったのですが、ちょうどそのころ地元の子供が3人、1度にはねられて亡くなるという痛ましい事故が起こりました。これは地元にとっても大変な衝撃でした。なんとかせなあかんと、住民が町内会費に10円プラスして運動資金をつくって、JRをはじめとする関係機関に働きかけて、高架事業及び管崎地区区画整理事業が決まったのです。

高架化と同時に区画整備事業で道路も広くしようというわけですね。そうすると道路体系も変わります。九州大学が出ていく、道路体系は変わる、という大きな変化の中で、地域をどうするか。これを契機に、町内会活動の枠を超えて地域の未来をどう描くか、という未来に向けたまちづくり活動を始めるようになりました。

### 3、みんなでワイワイやるなかから、民主的な意思決定が生まれて

#### くるー公共性の構造転換

私は町内会の役員もやっていました。日本の町内会、部落会、隣組という仕組みは、大東亜戦争という総力戦に向けた国会総動員体制に起源があります。昭和15年の部落会町内会等整備要項ですね。この遺産がずっと残っているような気がします。住民の側にも、行政の仕事に協力するという体質というかDNAが連綿として続いているのではないかと思います。地域の諸団体は行政の下請け機能的な機能を果たしているところが少なからずありました。上からの、つまり行政からの支持や依頼には協力するけれども、草の根から地域の問題を積極的に解決していこうという動機というかメンタリティに乏しいのです。そこで、足掛け4年かかって、地域の有力者を説得し、地域づくりの新しい組織として「箱崎まちづくり協議会」の設立に漕ぎ着けました。

まちづくり協議会(=まち協)ができると、住民は実に活発に、主体的に動き始めました。やはり、日本の地域社会には住民自治というか住民こそが地域経営の主体であるという古来の伝統が生きているのだと感心したものです。とはいえ、旧い町なので、どうして

も自由闊達にわだかまりなくものが言えるというわけではありません。そこで、地域の同年のおやじたちを集めて管崎まちづくり放談会というまちづくり団体を立ち上げました。この団体は10年くらいやりましたね。オジサンたちの酒飲みサークルみたいなものですが、一応、言いたいことは言っても根が持たないとか、飲んだ時の約束は守るといような決まりを作りました。ちなみに私は元来が上戸で、酔った勢いで「俺がやる、俺が金を出す」ということが多々ありました。

この中で、商店街の活性化にも取り組みました。しかし商店街の真ん中にあったスーパーが撤退することになった。300坪くらいの土地でたいていそういう場合は駐車場になったら賑わいはなくなる。そこで何とかそこに店舗が出来ないと、建設会社に向けあいましたら分かりましたという話になりました。分譲だから、あなた方が責任持って下さいと言われた。

ちょうど不況時で、なかなか買い手が見つからず困っていたところに、ちょうど私の実家の土地が売れて、飲んだ勢いで「俺が買う」と酒の場で言ってしまったのです。店舗はテラス付きの26坪くらいのもので、レストランを併設した「民設公共スペース 管崎公会堂」を作ることにしました。放談会の副会長が建築家だったので、彼に建築は任せました。それまでは公民館とかを使っていたのですが、公民館は時間になったら帰れとか、飲食はだめとか、ものを売るとか、使い勝手がよくないですよ。だから、自分たちが好きなように使える空間をつくろうということになったわけです。

管崎まちづくり放談会のメンバーは、集まっては酒を飲みながらまちづくり談義をしているわけですから、どうせなら他の店に金を落とすよりも、自分たちの居酒屋に金が行くようにしようということで、知り合いのシェフを連れてきて、レストラン「Café 万福館」を始めたわけです。そこで、酒を飲みながら、まちづくりについて話し合い、できてたアイデアをイベントとして実行したりしていると、だんだんと仲間も増えてきました。また、参加者からのいろんな提案も増えていきました。こうして、管崎公会堂を拠点にしながら、色々な活動や事業が始まっていきました。

私は、このような活動のうち、継続性があり収支が発生するようなものを市民公益事業と読んでいました。この頃、コミュニティ・ビジネスという用語がはやりましたが、私はこの言葉はあまり好きではないんです。というのは、コミュニティでビジネスをやるのなら、八百屋さんだって、魚屋さんだって、洗濯屋さんだってそうですから。市民が公の利益のためにやる事業をいう意義がコミュニティ・ビジネスからは伝わってきませんよね。

自分たちの場というか空間を持つと人が集まるようになりますので、いろいろなアイデアが創発されてきます。このように市民の討議から公共的意思が形成される場というのは、ドイツの社会学者、ユルゲン・ハーバーマスが『公共性の構造転換』説いたところの公共圏に近いものではないかと思います。彼は、歴史的には、17世紀以降に発展したロンドンのコーヒーハウスとかパリのカフェでの議論から市民革命にさえつながったと言っています。が始まったということで、民主主義社会におけるそうした公共空間の重要性を説

いているわけです。そういう意味で、管崎公会堂をひとつの公共空間にしたいと思ったわけです。たいていは飲みながらの議論になったわけですが、しかし、通常なら酒の席でタブーとされる政治や宗教の話題でもタブーなく議論しようということで、実によく議論していました。

劇場も作りました。管崎公会堂の向かいに元歯科医院の建物がありました。ここが使えたらいいな、と話し合っていたところ、あるときその建物の家主さんがふらっと管崎公会堂にやってきて、「あんたたち、いいことやっているようだから、うちのビルを使わんか？」と仰るのです。酒を酌み交わしながら、「タダでいいですか？」と尋ねると「いや、タダじゃいかんばい」というやり取りのなかから「崩してもよかですか？」、「よかばい。」と酒の勢いでそこまでとんとん進みました。では、崩そうということになって、とにかく既成事実を作るために翌々日に解体し家主さんに報告したら、「ほんとに崩したとな？俺はあんとき酔ったから、ああいうただけなのに。」と弁解されましたが、「いや、うちは酔った時の約束は守る、ですから」と結局既成事実が強みを発揮することになりました。

そして、その歯科医院跡地に、「テアトルはこぎき」という劇場を作ったのです。建設資金は、家主さんに2000万出してもらいました。家主さんも最初はしぶりでしたが、「この低金利の時代に、私がお払いする年240万円の家賃からローン代の120万円を引いても、年6%の利回りがあるじゃないですか！」という説得に妙に納得されたのです。しかし、劇場には備品や運営費も必要ですから、株式会社テアトルはこぎきを創立し、1株5万円の株式を200株発行して、それで資金調達しました。たぶん、日本初の市民株式会社方式のまちなか劇場だったのではないかと思います。

またカーシェアリングもやりました。これは実際の営業ベースとしては日本で初めてだと思います。九州電力、福岡市環境局、環境NGOと私たち管崎まちづくり放談会の四者協働でNPOカーシェアリング・ネットワークを立ち上げ、取り組んだ事業です。電気自動車を使い、最盛期は30台くらい、福岡市内で四か所ほどステーションがありました。私が京都に来たこともあって、その後この事業はマツダレンタリースに売却しました。現在、カーシェアリング全盛ですが、その先鞭をつけたのではないかと自負しております。

#### 4、農業を使ったソーシャル・イノベーション

こうした背景のなかから、ソーシャル・イノベーションということが出てきたのです。だから外国の事例や文献から、ということではありません。

大学院でソーシャル・イノベーターを養成するところは、まだ少ないと思いますが、社会的なニーズは確実にあります。子育てなり仕事なり、ある程度人生経験を積んできた人たちのなかには、自分の生きている意味はなんだろう、何のためにこれから生きてらいいのだろうと考えた時に、社会のお役にたちたい、人助けをしたいと思う人もいます。そういう人たちに、こうした学びの場を提供して、あなたが持っている世直しのタネみたいな

ものを、こういう風に展開していったらいい花を咲くのではか、という機会を提供する。そういう場が、大学院の新しいひとつの方向性としていけると。九州での経験も含めて、私にはその確信がありました。

やってみると、やはりそういう人たちがたくさん出てきた。社会人が多いので、平均年齢は42・3でしょうか、今の最高齢は74歳ですね。京都ということもあるかと思いますが、老舗の酒蔵のおかみさん、錦市場の八百屋さんなど、多彩な顔ぶれです。

ひとつ今やっているのは、農場（同志社有機農業塾）です。三千院の近くにあるのだが、翌240年、有形文化財の藁葺きの農家を借りています。実はソーシャル・イノベーションコースを作った時から、職との関係を考えていました。先ほどの九州の居酒屋も、シェフが体を壊して辞めた後は、「命と食と農をつなぐコミュニティ・レストラン管崎公会堂」として、女性たちがやっていました。そんなこともあって、命と食と農の連環を一つの焦点にしたいと思ったわけです。

言うまでもなく、命と食は密接な関係があり、「いい食」というのは「いい農家」から生まれる。だから農業が大事だということで、私が同志社に来る前から有機農法もやっていたし、農業者との交流もあったし、福岡の食育ネットワークの会長もやっていました。さらにイタリアスローフードやアグリツーリズモを現地で学んだこともあって、田舎は力はすごい、ぜひやろうということで、大原に農家キャンパスと農場を開くことにしました。

長澤農園さんと一緒にやっているのですが、この方は室町時代から数えて17代目の農家です。たまたまうちの大学院の最初の修了生だったのですが、この方が大学院に来ているときに、W君という院生がいました。彼は全く農家と関係がない家の出身で、いったんSEとして東京で就職したのですが、「向いていない」ということで相談に来ました。そこで「君は顔が農業向きだから、有機農業をきなさい。」と言ったら、あっさりその気になってくれました。私の仮説は、非農家出身の学生でも、①農地、②よき指導者、そして③販売先を確保したら、農業者としてちゃんとやっていけるというものでした。いわば、彼を使って、その仮説を実証する社会実験をやったようなものです。また、このことは彼自身の研究課題となり、彼は、博士後期課程まで進んで、博士号（ソーシャル・イノベーション）を取得しました。その仮説に基づき、彼に大原農場と農家を提供し、長澤源一さんという日本でもトップクラスの有機農業者を指導者につけ、かつ「大原日曜朝市」という人気のマーケットでも販売できるようになったのです。彼の有機野菜は、たいへん味がよく、京都の有名料理人が買い付けるようになりましたし、NHKの番組「猫のしっぽ、カエルの手」のベニシアさんがお得意さんになったりしました。

長澤さんのほうは最初有機農法ではなくて、慣行農法でネギ（九条ネギ）を作っていた。ネギというのは農薬をたくさん使うのですが、彼は農薬中毒で一度死にかけた。農業をやめるか、農法を変えるかということで、有機農法に転換したそうです。10年間苦勞しましたが、彼の作る野菜は超一級品として、嵐山吉兆はじめ一流の料亭やレストランに納められています。

W君のほうは今や年収 1200 万です。農業でこれだけ収入があるというのは、すごいことです。なにしろ、食べるものは買わなくていい、通勤費はいらない、食事は毎日家族と一緒にという生活ですから。その後、就農する学生が何人か続いています。

他にも、一般市民でこの農業塾に入ってくる人が何人も続いて、会社に勤めていた人が就農していったりしています。大原も、農場を作った当時は耕作放棄地だらけだった。しかしこうして有機農法が当たるようになってからは、東京や大阪に出て行った子供たちが帰ってきて農業を始めるケースが増えていて、今では農地は足りない状態です。子供が増えて保育園が十年ぶりに再会するなど、人口も増えていきます。農業でまちが変わったという事例で、これが農業を使ったソーシャル・イノベーションですね。

## 5、過疎の村は、自立力を生む「最高のテーマパーク」～都市に田

### 舎は欠かせない

もうひとつ、これは同志社大学政策学部今里ゼミの取り組みなのですが、京都府京丹後市弥栄町野町区という、人口が 120 人くらいしかいない、いわゆる限界集落で「ふるさと共援活動」を行っています。去年、古民家の改装を始めて今年の五月に完成しました。そこに学部のゼミ学生を継続的に泊り込みで入れようとしています。

私は自作力（自分で作る力）とか自給力、これが自立力を作ると考えているのです。ここでは農業ももちろん教えますが、味噌や醤油も自分たちで作る。山の中に泊まったり、川で魚を釣ったりするし、鶏を絞めるのは当たり前という、自作・自給の技術を教えています。また、これは大学院の話になりますが、綿を植えて、綿から糸を紡いで染めて織って布を作るという授業もあります。こうした布作りは、ソーシャルクローズとかスロークローズというんですが、こういう方法で精神面を病んだ人を癒そうという研究をやっている人もいます。そういう人に先生をやってもらったりして、自給自足型生活研究というものをやっています。

去年からは院生に免許を取らせて狩猟も始めました。京都市北部の国際会館付近にも鹿が出るんです。もちろん、野間ではたくさんいます。そういうことを通じて、自分で生きていく力、総合的な生存力を身につける、それが課題です。そういう人間になることが、世の中を変えていくことかなと、考えています。

京都府警で 30 年務めたのち、学部から大学院の政策学部に来た女性がいます。この人は府警時代にライフル射撃の日本記録を持っていて、彼女が射撃の先生です。鹿の獣害は、今や国土の危機です。ヤギと違って全部食い尽しますから、表土がむき出しになって、雨が降ると浸透してそこから土砂崩れ、鉄砲水になるわけですから。

初めて田んぼに入った、川に入った、という学生たちが、「先生、野間は最高のテーマパークや！」と言うんですね。そのうち、自分たちで自主的に行きはじめる。卒業しても通

うんです。なにもない田舎ほど面白いと。私もそう思います。

里山資本主義という言葉が流行っていますが、よくみたら田舎にはいろんな資源がある。かつては日本の農山村がなぜ豊かだったかと言えば、山の木で炭を焼くエネルギー産業、貴を材木にする素材産業と、まさに第一次産業が栄えたからですね。それがなくなったから過疎化し、高齢化が進んだわけですが、これをまた素材産業やエネルギー産業として取り戻せる可能性があります。

そうすれば雇用も増えるし、これはツーリズム、農業を加えていけば、田舎に人が戻ってくるようになると思います。また私は、獣害ではなく「獣益」と言っているのですが、欧米では鹿肉がブームです。最高の赤身ですから。必ずこれはものになると思っています。

ソーシャル・イノベーション研究コースは、「現代社会が抱える様々な病気を治すお医者さん、すなわちソーシャル・ドクターとして、社会起業家を育成しよう」というものです。これは理論を学ぶ座学だけではなく、学外の現場に足を運んだり、地域の方と触れ合いながら研究を進める必要があるわけです。そこで、この野間をはじめとする大原の農場（「農緑館」図1参照）、そして町屋を改装した「江湖館」（かまどでご飯を炊いたりする、図2参照）といった学外キャンパスで自作力、自給力を生み、自立力のあるソーシャルイノベーターを生み出していきたいと思っています。



図1 大原の農場「農緑館」



図2 「江湖館」

(引用:同志社大学大学院総合政策科学研究科 ソーシャル・イノベーションコース HP より)

## ■ 質疑応答

Q: 社会には様々な課題があるが、政策レベルで解決しようとするとき身近にいる存在として公務員や官僚などといった方がまずはじめに出てくる。先生のご指摘の通り、「地域をよくしてみせる」というたぎるような情熱や使命感・ビジョンをもっておられる方は政策を作ってしまうが、果たしてそれらの要素はもっていないとダメなのか。第一線の職員として政策形成ができ、地域社会を変えるまたは政策を変えていけるような官僚としてのあり方とは。



A: これまでたくさんの第一線の職員と接してきたが、まず仕事で仕方なく来てる人も少なからずいる。そういった場合、現場でやっている我々と共感が生まれにくい。一緒にやっていくには何らかの職務外プラスアルファ（自己犠牲）をやらなきゃいけない。そういう同志といえるまではどこかで身を切ることが必要かと思われる。

地域の住民というか当事者は、冷徹に見ている。以前福岡でまちづくりをしていたが、徹底して付き合ってくれた方達は、現在助役や局長などに就くなど、行政的にも評価されている。そういう方達は様々な困難が生じても逃げない。それは行政も町内会も同じである。決意と踏ん張り意志が大事であり、相手の話を聞く力が必要である。

Q: 有機農法がなぜ当たったのか。それと今後の農業について。

A: 有機農法は日本ではまだまだシェアというか量的には少ない。昨年と統計では、0.18%。欧米では例えばスイスなどでは 20%以上であり、アメリカでは 10%以上。韓国や中国でも大変力を入れている。なぜかと申しますと、日本は OECD 諸国の中でも、もっとも農薬や化学肥料などを多く使用し農業をやっている。

米などは、一等米・二等米など規格が決まっていて、例えばカメムシを 1 kg の米の中に入れて、1 粒でも噛んだらそれは二等米だと。行政や農協が決めた品質を守るために、地域全体で計画を立てた上で定期的に防除しなければならず、農薬を散布するという。そういうある意味行政的な制度が有機農法の普及を妨げている 1 つの要因である。

しかしながら一方でニーズはある。安心安全な農産物に対するニーズは高まっている。なんちゃって有機農法は多いが、JIS の有機の認証のついた野菜は探すとなるとほんとは少ない。値段もそこそこする。しかし需要に供給が追い付かない。そのギャップがあるから有機農産物の明るいマーケットである。有機野菜のパワーは凄まじい。身体にもよく、しかしその存在に気付いている人は少ない。

Q: 大原でなされている食農について、米なども作られているのか。また作る過程において民具なども使用して実践されているか。

A: 米も作っています。しかしイタチやカラスの攻撃が凄い。古い民具などは使用していません。ただ、麻掛けして千歯扱きで脱穀して精米所へ持っていくことをやっている。

子供たちが、手狩りしている。今年もやっていたが、雨が酷かった。自分たちで作る新米は美味しいらしく、子供たちも満足している。

Q: 地方で何が出来るかと考えた際に、農業など単純に考えてしまう。農業というやり方で地域再生の可能性についてどのように思われているか。その際の問題点などもあれば。

A: 農業一般では地域活性化はできないと思われる。どんな農業をするか・どんな作物を育てるか・どういう付加価値をつけていくかということによって全然違う。

例えば農業で、多角化で成功したのは事例として、大分県大山町がある。大山町は、

木の花ガルテンという道の駅があり、売り上げが 15 億ぐらいあり全国でもトップクラスの産直。木の花ガルテンは残ったら持って帰るではなくて、残ったら全部引き取って料理にして、木の花ガルテンのパイキングで出すというやり方をしている。

また以前農協の組合長であった矢幡治美さんは革新的で、「ウメ、クリ植えてハワイに行こう」をスローガンに梅をつかった様々な加工を行った。また緒方英雄さんという当時の企画課長（現：ひびきの郷総支配人）は自治体職員として行動力などすごい方であった。

そういった方々は、地域を育てるには農業ではなくて若者に目をつけて人材を育てた。また彼らは消費者が何を求めているかいうことを的確に把握し、それに応じた販売戦略（マーケティング）をやって、マーケティングがあって初めて何を作るかということになる。だから一方的な考え方ではダメであると思われる。同じ商品でも、パッケージを変えるなど工夫する必要がある。

私は農業を行っている学生に言うが、「お前らは百姓になれ」と。百姓とは百の姓。姓とは食農のことであると。天文学や気象学、化学など様々なことを知らないと百姓は務まらない。絶えず勉強しなさいと。百姓ほど難しいものはない。総合的なディシプリンだと言っている。

Q：これからのコミュニティがどうあるべきなのか。世代交代も含めどのようにビジョンをお持ちなのか。

A：京都を例にあげると、京都御所の東東南の角あたり「春日学区」がある。ここも 20 年前に廃校になっているが、高齢化率が 65% というものすごい高齢化である。ここはコミュニティ溢れるところで、地域政策学会や地域コミュニティ学会では有名なところである。それは、町内会で社会福祉協議会を作って一人ひとりの高齢者に対しチームを作って（警察・消防・ケースワーカーなど）お世話をしてトータルでケアをする。他の町内会は廃れはじめているが、春日学区の場合は地域を支えている。防災をきっかけに孤独死などをさせないという決意で発足した。中心となっている高瀬博章さんは床屋を経営されていて、床屋さんはある意味戦略的拠点であり地域の様々な情報が集まってくる。そのため地域福祉マップを作って高齢者一人ひとりの状況把握が行われている。

世代交代については、千葉県に幕張の町内会も別な意味でパワフルです。幕張という町は IT 産業とか先端のところで働いている若い家族の人達が住んでおり、町内会でホームページや facebook などを作り SNS でデジタルコミュニティ、デジタル町内会を作っている。情報交換などをして 1 か月に 1 回にオフ会して飲み会などを開催するなど最先端なコミュニティもある。幕張の例はこれから重要になっていくと思われる。

以上